

猿義集瓜多し全
猿談我
下巻

中村俊定文庫
文庫 18
414



田代

猿蓑集爪志

全

原本現寸大制本
原本松雪文庫藏本
青色表紙
草花文の押形あり

水口

香

水口香

猿蓑集札あり一存

猿蓑そ他諸の古今集をこれに道一

松子もものゝまの山々集りかゝりて

あまのむす事もの作らるるを

かたし古風なりし語猿蓑の物と

こゝろうしりてしりてしりてす

りてしりてしりてしりてす

去来凡此撰若くはも美ハ甚おの

あきとんく此集此みやむとありひ
 探集のころいふかりとん此集わらう
 とも物と事とくして何と母の務書の
 昔の取らういふ何とんとん此
 歎ひよく風くくくく

この書は西平年如月日

伊勢の國河津

杜勒源吉

杜勒わくく世勢いと後
 なまき仲くくを風駿子
 何とんくく色蕉下此集書を
 ここのむ遺書お月うらみ
 あとに務書集と信くく
 とのやとくくくく
 其とくくくくく

むらり此かきたもるあう
後りあふつあてんまう
あふあの日あ人を袖あ
らぬあうらうあふあう
とらうあうあうあうあ
あれと梓あふあうあ
回しあうあうあうあ

あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ
あふあうあうあうあ

あふあうあうあうあ

是公の近代の後伊賀の之の
おのふらふらふらふらふら
し持しせしめのおふらふら
ふらふらふらふらふらふら
おせしめふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
を確守しめふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

とふらふらふらふらふら
せふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
精進おふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
他ふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

とてのうらみ

神のれ 猪毛山麓と伊 甚良

吾子の序文の 物知りた跡のい

伊勢の 一山と伊勢の 伊勢

伊勢と見入し 各空の 伊勢

うら くれあさの 枝のうら

たはま 七か葉伊 伊勢の 伊勢

見入りの 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

伊勢の 伊勢の 伊勢の 伊勢の

③
たのううみて三井寺の隆とて
られしとて舟とて橋とて
多の地帯地と取んと天
とて女は湯文命とて
とて舟とて

付る事舟とて舟とて舟とて 千那
備は舟とて舟とて舟とて
湖とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて

伊とて古とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて

葉の舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて
舟とて舟とて舟とて舟とて

③

陸のついでに、*Japan* 記
一りの旅日記

可憐な女主人、ついでに、*Japan* 記
馬あつて、*Japan* 記
此のついでに、*Japan* 記
是のついでに、*Japan* 記
子や、*Japan* 記
紅毛のついでに、*Japan* 記

里一馬に、*Japan* 記
女主人のついでに、*Japan* 記
一りの旅日記
馬あつて、*Japan* 記
此のついでに、*Japan* 記
是のついでに、*Japan* 記
子や、*Japan* 記
紅毛のついでに、*Japan* 記

レ

(*)

クーまんとまじらうひびかりおまハ
くまのまじらうひびかり

之國の釋教煙——くれうま 昌彦

その龍田ハりうまも有——芥捨

いっ釋教のまじらうひびかり煙。

まじらうひびかりまじらうひびかり

くまのまじらうひびかり

まじらうひびかり

くまのまじらうひびかり

けりまじらうひびかりとまじらうひびかり

おまじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

まじらうひびかりまじらうひびかり

ト

(1)

治るれい今ひとまに中ゆせらく
あつことと方ゆれ行航はけさ
ふと作しと真鏡も中よこり
ふんとと後をも物あつれなる
撰者のころ是をそるしよ
たれさうあつれなるあつれ
— ちきく —

丸心 巻上 流

枕善集丸心 巻上

伊勢津

杜勒述

此集 一 巻上 伊勢津 杜勒述
白丸心 一 巻上 伊勢津 杜勒述
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる
あつれなるあつれなるあつれなる

丸心 巻上 流

あゝ物紅く白えれはらういほも其の
少の能存ともうたまのうハノ福の
山好しまりくはま領しあうて
洞まゆのまほほはのうしーまは
體ふもまうしてあま書ひけうおほ
の舞人の結さうしうてまうく
女のあまれはくはに結まの物さ
まらぬしとせれとまうてまう
力の結とせれとまうてまうて
湖あ

何事か (Carnegie) の世の末より
断絶しとせれとまうてまうて
何事か (Carnegie) の世の末より
まらぬしとせれとまうてまうて
湖あ

下

②

續技論

かりに後技者儀へ前技取りこのうの
集まりと評言のついでに後技の
めりては後技を傳ふもあらず
其意の撰りも見むと云ふは
うけふはめと云ふも多しこの處二席の
為并技と評言の伊勢の四林集を
續技の義限ありしと云ふは
遷化にあふと云ふは後技の義を
遷るるは一と遷化をいふは

内記
外記
未

園文

さしづめ日あるは物主人今後細の事
越前長男の傳り集ありし行り近
以て伴するは南交る人も後技
藝は七部の外は集りたりと云ふ
又人のあつしあつしといふは
いふと云ふもその如き事あり
よれ後技を云ふはあつしといふは
節より云ふは前技を云ふは後技の
物より云ふはと云ふは今後細の事

田

11606 11607 11608 11609 11610
11611 11612 11613 11614 11615
11616 11617 11618 11619 11620

11621 11622 11623 11624 11625
11626 11627 11628 11629 11630
11631 11632 11633 11634 11635
11636 11637 11638 11639 11640

11641 11642 11643 11644 11645
11646 11647 11648 11649 11650
11651 11652 11653 11654 11655
11656 11657 11658 11659 11660

11

(2)

謝子保工年尾成日釋が
六の花集に
力三の自として
表紙の作として

△説明を輝文

とある

謝子保工年尾成日釋が

六の花集に

力三の自として

表紙の作として

△説明を輝文

とある

謝子保工年尾成日釋が

六の花集に

力三の自として

表紙の作として

△説明を輝文

とある

謝子保工年尾成日釋が

六の花集に

力三の自として

表紙の作として

△説明を輝文

下

(1)

なごめるかしら
かくいふもあつらふ世みちの
けしきとよはあふれ志の
あふれしきしきあふれ

流志々々 卷下終



天明七丁未孟屯日

書肆
京都 橋屋治兵衛
洞津 山形屋傳右衛門

後漢書下

昭和十三年二月十日伊豆熱川温泉土屋別館



猿蓑

猿蓑義

下卷 (附向大意)

九十論九
前論の噂
断ると難



附合木景

丸紙の通交と云ふは、世の世字と云ふは、
舟の紙の通交と云ふは、世の世字と云ふは、
と云ふは、世の世字と云ふは、
似合さるは、世の世字と云ふは、
傳うと云ふは、世の世字と云ふは、
立の世の世字と云ふは、世の世字と云ふは、

玄炭打

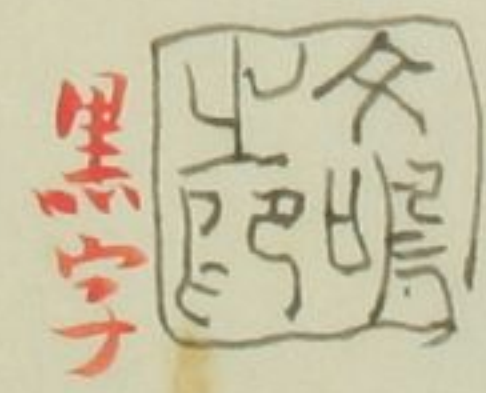
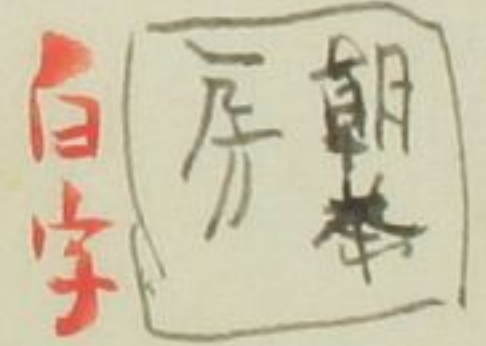
水
石
山

の事ハ口受の速し

正風芭蕉道統五世

皇都 朝茶房文鳴著

朝茶房雅隨事戸田文鳴編
かはつ伝 半一 室一十三丁大月板
享和即田蔭八外一軒
言思立冬仙亭 自序 鹿鳴園文和殿自跋
天理永年



前
まのゝ産の著述のついで

は前より理とよき徳長の馬と一ツケし徳子
小は山よせの荒地は海に草生を去けりゆつた
子地錦這ひのりる人海の帯をりけり餘
情をえしてその月の影をそのつらも介意は
新徳勝とよきしついでゆすけりけり他徳長
推量所あり

人
まのゝ産の著述のついで

栗栖也といふ某柑子の指を挿し新徳長をさしは
あつて菓木の忍ぶはあしのふ拙く思ふれし

補佐のうきんふ見報を果して付つてあり

其二
のうきんふ見報のありては

其のきり廻りてしつては
は名もあらず持師の字もあらずしめしめたるも
呼しとて五七文字の局を前を却してありし
く秋書こと宗元一運ひて林の信頼三白目の御
事仲ありとある

前の
昔ありては死するまでありては

此前のうきんふ見報のありては
種掛新常駐の趣ありては
種掛新常駐の趣ありては

同報のありては月の御報とはまじりたりける
色ありては昔ありては
其風景見渡の感ありては

附
ひとりのうきんふ見報のあり

昔ありては死するまでありては
自身の御付也人の常として
耳先の信ありては
其のありては

其二
のうきんふ見報のあり

前川の腹よりとび渡り仕使のヤウと付付あり
仕使とは唐土の用事の名有り
も依りて其の旨の旨を付てんるし物
めの手は時々電の下をくま物なるゆゑつ可也
甘道作の廻り聞かす
えんとの催しも佑も頼母も
金百斤を借りしり
とらひしは人の軍も
あんとありて

わらけの山陰万不自由ある
峰の廻り
北風

肌骨の硬り
火と

早先附より
直向り
即ち

前川の
とら
量



その
もの

骨のまゝ起る力あり

春日の海に遊ぶ人の病を治しては春の養生
と云ふ事も出来ぬは用ひぬと云ふ事
このまゝくまゝ痛みのしるしを治す事
保赤の良薬益々建中の法と云ふと學問見え
のれて付也

その
もの

のまゝと云ふ事

あつた場は田舎の難儀の起る所は
まはりの都方の女子のまゝに
まゝの痛みのしるしを治す事
保赤の良薬益々建中の法と云ふと學問見え
のれて付也

その
もの

骨のまゝ起る力あり

春日の海に遊ぶ人の病を治しては春の養生
と云ふ事も出来ぬは用ひぬと云ふ事
このまゝくまゝ痛みのしるしを治す事
保赤の良薬益々建中の法と云ふと學問見え
のれて付也

仲
の

その
もの

つらみも終るうらふとあり想を懐とる平句
 雲のしらべあまき世翁の句も川子ぬは蘭を種
 珠の白は世とらふ或人甚く匠を知らん中とあり
 蘊奥と傳ふれん風情を辨へんとある集の中
 に門子のぬはそて川子蘭のぬはひがとある集
 一たりぬはぬふ思ふ蘭の種も如藤珠も付
 手ぬはぬしとあり理屈もハ能くしし蘭もそ
 て川の句とそとに風情も魂もある事なり已う
 解せぬゆへ人も聞まずしとある後進と感するのこ
 ら甚く門のゆへ古花よりとりとも無麻にあはれは
 眞の真門の句意多んと理屈の真の真
 屈也也

市井
 前の
 いのち

姑
 一
 柳
 東のよこ

前には草花の類くみそは打やるといふ句なり所
 謂草花のとは世に塵俗をあらわすものなり
 たり花をいふとある一人の来るものといひ住む
 人又あるしと引よせし結ひし集の初カ元の地
 系とあるより一所を住む此の若くを傳ふは野古家
 の意まよ思ひ出るといふよこの五五二たては家
 の初めより名し初めり世は形もんシヤウ
 ちとよとある。境界は只ありた純固ありの徒
 ちとよか前の体取のむまひらとて徳法師
 ちとよとあるのちとよはちとよとありて都柳集

柳集

五

ありとては母の御心をなすのちの始しやあり也
と記すはして途中までお出されし其趣の意
よりいふに付して附呈附

附呈
すゝめり〜まゝおけりたるにせしめて

の西宮はそれとてして意をなす西村の行状と
はなるに計三分の輪廻とて言れ終しなり終上人
のゆかし御座るといふし時さあるよりして思ひまゝ
れ其よりなるを奉し侍り如きは其言ありと
同様に常として自らお尋ねの事と極くは意を
来付し書付の極まり極まりとていふを難し
はれあるとし極まりは五箇とていふ又或時な

日の度尺の度尺はカ地と極まりとていふ意のまよりの
志午のよりのあつたの事はよし此御座の事とていふ
なりいふあかき御座りやいふとていふ〜
から意も〜とていふ附する〜
の御座り〜
あれ〜

其
其の甲ををりやあり

お尋ね事な御座り〜
は〜
の意を御座り〜
は〜

お尋ね下

赤い糸と大根は小龍田川
朝平運して通る 楠 柴
廣平の 少島丸居の土俵
何う見つけし馬あつた
馬の くの 煙を 月の 輪を 知し
ふねつ 三つ白の 羽の 龍
立寄子 五方の 龍の 強き 真き
名 芥田の 宮子 ぬき 袋解く
其 共 其 共 其 共 其 共 其 共
其 共 其 共 其 共 其 共 其 共

了 陽 夢 和 仙 馬 和 陽 茶

慈徳宗子 あまの ぬけ道
あま師 花の上 舟の 迫り月
八百 八所 一 五 あり 七 廿九

年 友 約

歌仙

越後の根

日連申

将きりし 松子 洲の 舟の 幼時
あまの 舟の 舟の 舟の 舟の
亭へ 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の

煙籠の翠を余所とひつる

冬仙

梅の春ニ在りし也知らざる

文和

梅の春ニ在りし也知らざる

瓜原

梅の春ニ在りし也知らざる

文憲

梅の春ニ在りし也知らざる

清白

梅の春ニ在りし也知らざる

吉柳

梅の春ニ在りし也知らざる

治友

梅の春ニ在りし也知らざる

忠二

米カシカ

総三

腰子のからりと妹のま

布初

青の類の正の字も清い

青茶

あつたまのしほいふるは園扇

真白

あつたまのしほいふるは園扇

了

あつたまのしほいふるは園扇

如

あつたまのしほいふるは園扇

吉柳

あつたまのしほいふるは園扇

瓜原

あつたまのしほいふるは園扇

了

虎草

天

ちかかみちのまはりの香
 小使して油をのりておとを
 ちかこの香まして短夜
 ねとく廻り中へ冬山
 本境界とるまは華地獄
 廻り人二十歳楚の店を代
 書家の色の手紙をのり
 高うおとをのりておとを
 中への節を吹送る

女
 邦
 言
 和
 方
 義
 其
 如
 高
 揚

新さへて植ふ近き後りも
 秋のぬえを極るおし
 飯前子 魚を先す甚定場
 菊を提へ 體 横さる
 枝一花子 近く九の辻
 日取代長子 柳一坊

了
 了
 了
 如
 了
 等

明治元甲申年八月廿六日

芭蕉翁道統二世菊阿佛許六先生報卒
 年之懐舊都鄙人之吟到来仕遅速

五ヶや 鶯ののり小梅 子母
鳥上吉川
 いづはあり 花神さま 秋の暮
在形園
 花さめあらし 母の 秋の暮
仙臺城野
 八景も世のみぬ 花母 秋の暮
越前
 十園子の 小枝も つる 糸 藤
日
 世の中 下に 下も 上も 下も 藤
日
 春のよ 五色の 秋の 暮
日
 春の 花の 内 秋の 暮
日
 水 花の 枝の 秋の 暮
備前
 水 花の 枝の 秋の 暮
備前

散てらや 今も 五柳の 骨。 龍
備中
 月 龍 花 介子 遺す 秋の 暮
備前
 藤の くる 一 箇の 暮 秋の 暮
備前
 四季の の 暮 秋の 暮
備前
 いづはあり 花神さま 秋の 暮
備前
 花さめあらし 母の 秋の 暮
備前
 八景も世のみぬ 花母 秋の 暮
備前
 十園子の 小枝も つる 糸 藤
備前
 世の中 下に 下も 上も 下も 藤
備前
 春のよ 五色の 秋の 暮
備前
 春の 花の 内 秋の 暮
備前
 水 花の 枝の 秋の 暮
備前

由はふらさ名一も也 鶴の子 仙臺廣利 文行

海客の鄙ひるもの風仙を 江 文介

泣け笑くもの所か月の照 江 本館

世々照す月の書何れ書上手 江 阿比

紅顔くものうら 江 牟水

桂進のおやまの虫の巻硯五番 江 東亭

五十年跡ま 菊の新色 江 東砂

鶴子の言何ゆらん 江 了石

志のふし 名跡の日のうきみ 江 戸京

志の川のおら 江 鹿童

下略

甲申の仲秋に五老并五十年子及

(一) 甚在 日 繪はとうて師とし尾緒は

教てゆとまると其仰も志守せて国々

をのらふし柳の清道と有くすあり

懐旧歌仙 越の根連中

之鳴拜

おれ枝や 経ては師とまるとはお記

おもひに思ふて急ぐまらり厚
 磨く人の趣は然るも
 茶道とて一しちせん暖まる
 呉服所のまゝの廻りの袴揃
 舟のまはりの清き塩さか
 牛とある田舎のまゝの白
 初鹿の子すゝのれのとく
 狐のまはりの客のぬき
 京の約きおのまゝの
 中
 文和
 冬仙
 香菊
 先二
 潮菜
 丘高
 湘雨
 香蝶

風とちつとちつと花
 前挽負て旅まらけ
 子と葛の松まらけ
 色香
 行番まらけ
 乳母の背中
 桐燈と咲き
 摘ま女
 西中
 精茶
 和
 甚石
 遠物
 甚
 道友
 如
 有場

おはすのおのむき行意地

馬

おぼろの光輝く名字あり

牛友

は^コ方のぬりてあはれま^チ砕

子

出世すゝ稲食教してさきん

子

弓強抱をゆるる目通し

寺柳

あらしそりと風のまやかしつらみ

約

あしよぬりけりなまをひつら

百箇

あ^女房よりおを去りける言ひ

言

澄^りり物さ^ら澄^りり月

約

あ^コりぬはさきま^コもあ^コん^コ嶽^コの^コ実

=

あ^コは^コあ^コま^コり^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

如

あ^コ入^コ—あ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

友

= 條^コあ^コり^コの^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

高

あ^コ—あ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

路

あ^コ味^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

茶

あ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

仙

あ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コあ^コり^コ

策

同哥仙

仙臺唐淵(中)

あ^コり^コ

三

有暇之更カ多カ子カ親のカ暇カも早し
 岸の糸の傳カよカふカ道
 人々も堅カひカゆカ客カ子カ秋カ立て
 箬カりカけカてもカ一カ首カ望カまる
 るカ儘カひカおカめカるカ向カひカ山
 うカゆるカ松カよカ地カのカあカりカ
 傳カ秋カよカあカまカれカゆカ子カとカ志カりカ付
 女カ帝カあカりカはカ帝カ女カ腕カかカ捨
 葛カ藤カもカとカゆカるカ左カのカあカらカ其カのカ足
 全人全里人里文人
 全人全里人里文人

うカゆるカすカのカあカのカ既カりカのカ親
 志カ三カつカよりカ縁カ之カ思カひカ情カけカ知カり
 驚カきカゆカつカてカ傳カるカ然カるカ
 傾カ甲カをカちカ之カのカ透カるカ三カつカりカ
 さカらカりカとカるカあカをカこカのカあカらカ其カのカあカ
 竹カ子カ折カるカ佐カ林カてカ後カるカあカのカ書カ
 内カ年カ書カ請カるカ休カまカれカとカ果カるカ取カ
 思カひカ中カ地カのカあカらカこカ地カ書カけカて
 あカりカしカ時カりカとカ獨カほカもカ白カけカぬ
 全人全里人里文人
 全人全里人里文人

続下

三

うへにまのあやふ指いむ早梅の
尼のかうり信あお唐せし
有理りを言はせし流を仕付形
鏡頭の透く梅葉又生徒
爪の端は山林の山せり入佛り
めつと尋燈子集り障と捲
巧秋の舞抱^{カキ}命の山組つらひ
空をまくと蚊母子啼く
始待心あしやる月と窓

人 人 人 人 人 人 人 人

おろそきと鶴夢ありし
廻くとえ結をひある鼻の香
昔古の形と親の飯昆る
本^{ヒラタケ}おのり子住メハリ 鑿^{クモ}鏡
山^{ヒラタケ}の山子横しよ
ちよつと^{ヒラタケ}花の影のゆめ
りあふ吸を煙るる
ましくり子掛^{ヒラタケ}のあまのま
とまよやらしき^{ヒラタケ}の昔

人 人 人 人 人 人 人 人

ヒラタケ

ヒラタケ

好々舎の主は芭蕉翁の跡を踏む無窮
の細砂をふくの如く人の見付ぬ花を
さかしくいふ好まぬありて子常を泥セチリコりし
言信の墓所と云共う夏の海子ゆめを
いふぬまひるると集めよは山嵐と川のまを
静か昔の晴を冷た又或時は越後のさ
の望を暮らひつり脚数年の印成り介
也帰来しても御座のそ余を備し諸家の
或と縁くと云々 慶應の番なるものと云

一 東の山にこころをなほ露花として解
の桃源別天地あり 吟翁又此にあり
書をうたひて 白々と註し 古翁の常
那法徳をよのり例に似て孫侯義と
起すし是年暮に江戸の洋を歩五十
年のめくりの如くいふは法徳の書
おまぬ 跋をよるに命すり而南流りて文
とよよの如く 昔思を感し 昔昔とん
おまぬの 昔に 馬馬を平一と跋をぬ(持子

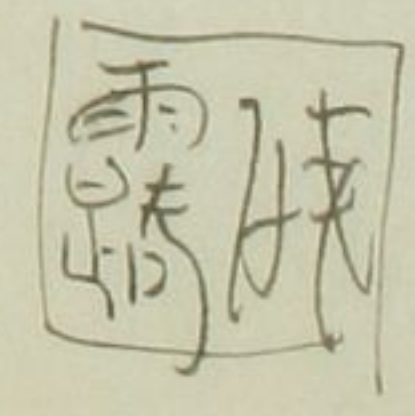
おまぬの

後序二

止世同志より領由並世世の補給也

明和改元歳八月去辰

都下 朝柳村 張屋書



水屋
27

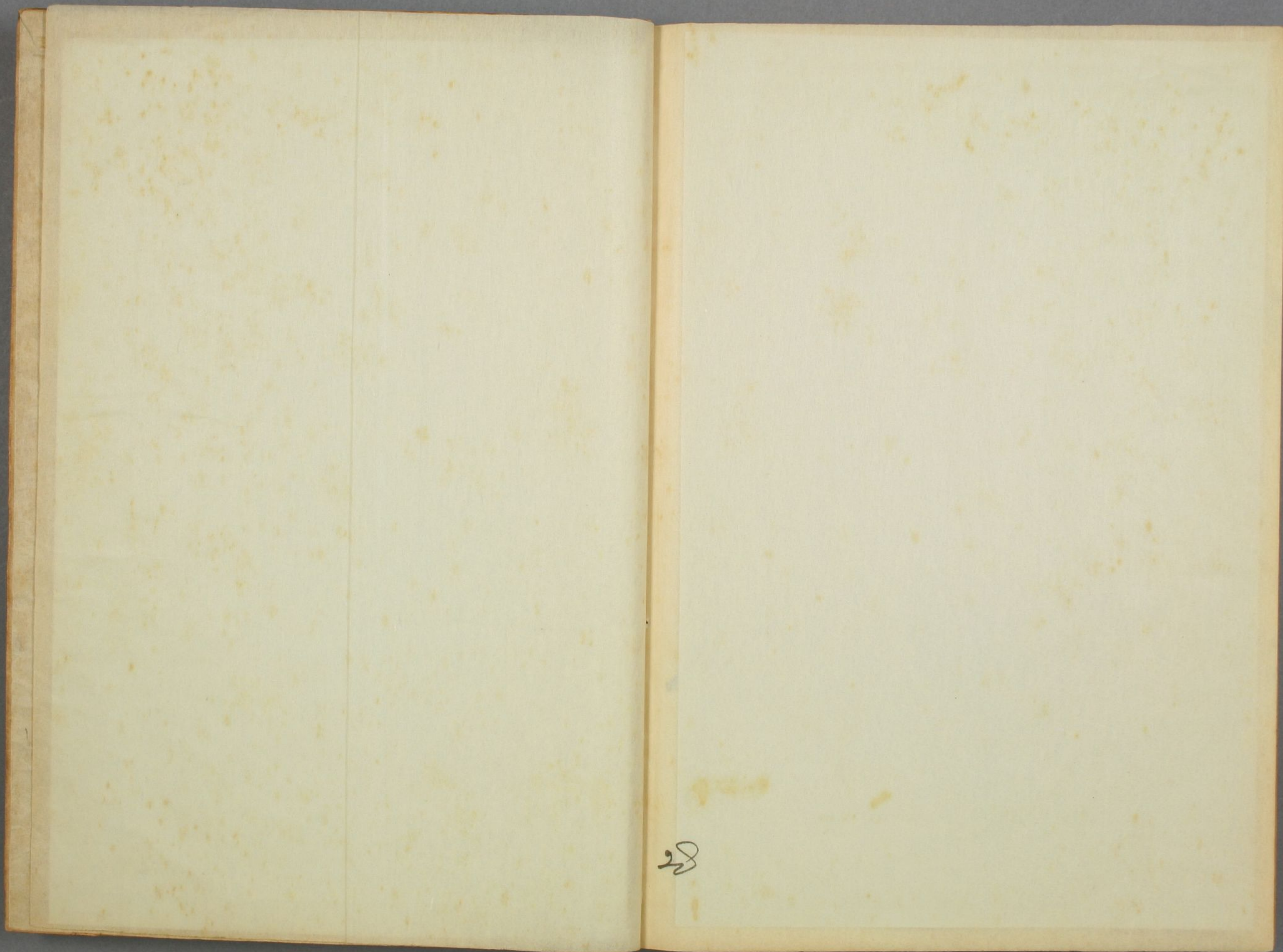
明和元申十一月

江戸通石町拾軒店

野田太兵衛

京二条通富小路西之町

野田藤八



28

